

「広島大学審査学位論文」

陶棺に関する考古学的研究

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D112383

氏名：宮岡昌宣

論文の構成

はじめに

第 1 章 陶棺研究の進展と課題

第 2 章 分類の基準—分析の視点—

第 3 章 タイプ分類

第 1 節 畿内の陶棺

第 2 節 吉備の陶棺

第 3 節 諸地域の陶棺

第 4 節 小結

第 4 章 タイプ変化と段階設定

第 1 節 1 段階

第 2 節 2 段階

第 3 節 3 段階

第 4 節 4 段階

第 5 節 小結

第 5 章 段階別タイプ分布の様相

第 1 節 畿内における様相

第 2 節 吉備における様相

第 3 節 諸地域における様相

第 4 節 小結

第 6 章 陶棺の展開とその意義

第 1 節 畿内における展開とその意義

第 2 節 吉備における展開とその意義

第 3 節 諸地域における展開とその意義

第 4 節 小結

第 7 章 陶棺の起源

—埴輪棺との関連をめぐって—

第 1 節 研究史

第 2 節 埴輪棺の分析とタイプ分類

第 3 節 埴輪棺の展開と意義

第 4 節 陶棺の起源と出現の意義

第 5 節 小結

第 8 章 棺形態にみられる階層差と集団差

—陶棺・木棺・石棺の比較を中心に—

第 1 節 研究史と課題

第 2 節 墳形と墳丘規模

第 3 節 石室規模と袖形式

第 4 節 石室床の仕上げと排水溝

第 5 節 副葬品

第 6 節 階層差と集団差

第 7 節 小結

おわりに

註・参考文献・遺跡文献

論文の要約

陶棺は、古墳時代から飛鳥時代にかけて用いられた焼き物の棺である。その数約 700 例、その 7 割が吉備に分布し、それに次ぐのが畿内であり 2 割弱を占める。本論文は、全国の陶棺を分析対象とし、特徴的な様相を示す陶棺群を抽出して、タイプとその変遷過程を想定する。それらの相互関係を追究するなかで、陶棺に関わる集団の動向、さらには陶棺からみた古墳時代後期から飛鳥時代の政治的社会的諸関係の一端に接近し、陶棺の歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

第 1 章において研究史を総括し、その到達点を踏まえた上で、主要な課題を次の 5 点とした。

1) 遺物の実見を基本とし、研究対象を全国の陶棺 307 例に拡大する。

- 2) 陶棺の遺跡や遺構中での出土状況、共伴する副葬品との関係などを考慮しつつ、分類した各タイプ相互の関係性や系統および系譜関係に接近し、文献史料との関連をも視野に入れて、地域ごとの展開状況とその意義を探る。そして陶棺全体に通底する歴史的意義の解明を目指す。
- 3) 陶棺の起源について、埴輪棺 230 例を分析対象とし、観察を通して特製埴輪棺にその祖形が求められる蓋然性が高いことを明らかにする。
- 4) 陶棺を基軸とした、木棺・石棺といった他の棺形態との比較研究を行い、棺形態における階層差と集団差にアプローチする。
- 5) 近年の発掘調査による新たな成果・知見を考慮する。

第 2 章では、分類の基準(分析の視点)16 項目を、実際の資料の観察に基づいて抽出した。抽出した 16 項目は、以下である。i) 焼成方法(土師質・須恵質)、ii) 形態(亀甲形・切妻家形・四注式)、iii) 成形方法(一体作り・別作り)、iv) 中央部分割の有無、v) タタキ技法採用の有無、vi) 棺全長ランク、vii) 棺高ランク、viii) 身・蓋の接合形態、ix) 突帯(構成・条数・断面形状)、x) 突起(数・断面形状・装着方法)、xi) 脚(轆轤成形の有無・孔の有無・タガの有無・配置・断面形状)、xii) 器壁厚、xiii) 装飾性、xiv) 蓋(稜線の有無・棟表現の有無・合わせ部の有無・孔の有無)、xv) 身の孔の有無、xvi) 棺内外の調整方法。加えて埴形・内部主体・副葬品などを加味して、全国の陶棺 307 例を集成し、分析対象とした。

第 3 章においては、分類基準 16 項目の組合せによって、全国の陶棺は、24 タイプに分類できることを資料の実見を通して明らかにし、それぞれの特徴と属性を浮き彫りにしている。畿内の 94 例からは畿内系 8 タイプが、吉備の 128 例からは吉備系 14 タイプが抽出でき、さらに出雲において洪山池タイプ、筑前では牛頸野添タイプが、それぞれ独自の展開をみせ、全国では計 24 タイプが展開したことを確認した。また加賀・甲斐・上野・陸奥などの例の中には、地域の中で変容し、これらのタイプにあてはまらない資料が少なからず存在することも、つぶさにみた。

第 4 章では第 3 章で捉えた 24 タイプが、どのような段階を経て展開し、その過程の中で、いかなる変遷をみせたかを考察した。陶棺は、四つの段階(1 段階:6 世紀中～後葉・出現期、2 段階:6 世紀末～7 世紀前葉・盛行期、3 段階:7 世紀前～後葉・多様化の時期、4 段階:7 世紀末～8 世紀前葉・衰退期)を経て展開したことを明らかにし、その様相を示した。また、タイプをめぐる系統および系譜関係について論及し、さらに分類基準の主要な項目について、その変化の過程を明らかにした。

第 5 章にあっては、24 タイプが、それぞれの地域のなかで、どのように展開したかをみるために、4 章で設定した四つの段階ごとに、地域ごとに分布図を提示してその分布状況の推移を探っている。そして、畿内系および吉備系について、各タイプの特徴と展開状況を総括的に一覧表に纏めた。

第6章では、陶棺のタイプの変遷・消長は、陶棺の製作集団および陶棺を使用した集団の動向を反映したものであるという視点に立って、地域ごとに陶棺の歴史的意義について論及した。畿内では、土師質亀甲形と土師氏、須恵質四注式家形とは須恵器製作集団との結びつきを、一方、吉備では多様な背景が窺え、鉄生産に関わる有力在地勢力、製鉄・窯業など手工業に直接携わる工人集団との関連を想定した。また、畿内および吉備以外の陶棺については、約8割が畿内系であり、吉備系は約2割に過ぎない点を指摘した。全国に点在、散見される陶棺の大半が、畿内系陶棺の伝播あるいは影響を受けて展開し、その約9割は須恵質陶棺であった。その多くが須恵器生産など火を制御し、火の使用をもって成立する熱産業地域に分布し、手工業を担う工人集団、さらに彼らを掌握、統括する有力在地勢力との関連を想定した。吉備系の波及は、千種川流域の西播磨に吉備系土師質亀甲形の纏まりがみられる他は、讃岐・周防・因幡・伯耆など近接する周辺に点在する程度で、極めて限定的であったことも明らかにした。また、今回の分析の過程で、河川や海路を介し、60～100km以上の長距離運搬を経た搬入品である可能性が高い事例が、数例存在することを明らかにした。これまで、数km内の狭い範囲と考えられていた陶棺生産地と消費地との関係を再検討する必要性を提起した。

第7章は、陶棺の起源に論及し、陶棺出現の意義についてもふれた。陶棺の起源については、埴輪と同質の製作技法によって棺専用に使われた特製埴輪棺に、その祖形が求められると結論付けた。畿内および吉備の埴輪棺230例を集成し、分析した結果、畿内における埴輪棺の分布と土師質亀甲形陶棺の分布域との重なり、さらに、特製埴輪棺と土師質亀甲形陶棺との間に、いくつかの特徴的な製作技法上の共通点が存在することを実見によって確認した。そして、畿内の土師質亀甲形陶棺の被葬者を土師氏および関連する人々の後裔と想定し、特製埴輪棺に埋葬された人々もまた、土師氏およびそれに関連する集団と推定した。土師氏は、巨大古墳群の築造、古墳祭祀の盛行の過程で、その権威や地位を高めた。そして、土師氏のもとで造墓あるいは埴輪製作集団の職長クラスを掌握する上位統率者の棺として4世紀後葉、特製埴輪棺がヤマト王権承認のもとに創出され、土師氏を象徴する棺形態として使用されたと推定した。古墳祭祀の衰退により、土師氏は一時弱体化するが、その後土師氏の人々は、進歩的な学問を身につけて、律令官人としての道を辿る。こうした土師氏再興の動きの中で、再びかつての職掌と伝統を表徴する棺形態として、6世紀中葉、陶棺をその後裔が自らの手で、作りだしたと捉えた。半世紀あまりの時期差を超えて特製埴輪棺と土師質亀甲形陶棺とを繋ぐものは、心象に刻まれた形態的な特徴と、土を焼き固めた容器に死者を葬るという土師氏に関わる人々に内在する心性にあったと推考した。また陶棺出現の意義については、横穴式石室および横穴墓の盛行と、それに伴う追葬に適應する棺として出現したと推定した。

第8章においては、陶棺に軸足を置いて、石棺・木棺といった他の棺形態との比較を行い、棺形態にみられる階層差と集団差を浮き彫りにしようとした。畿内および吉備において古墳築造の契機となった一次埋葬棺213例(陶棺50、木棺80、石棺83)を集成し、墳形・

墳長・石室規模・副葬品などの項目で比較分析した結果、石棺を上位とし、木棺と陶棺とは僅かな差異で木棺優位の階層性が形作られており、基本的に棺形態の違いは、被葬者の縦方向の階層差の表れと分析した。しかしながら、陶棺においては、その出土状況、副葬品組成の特異性などから、陶棺の使用集団の出自性や特定の職掌を担う職能集団が想定でき、陶棺の選択には、明らかに集団差の論理がはたらいっている。棺形態の選択は、ヤマト王権あるいはそれに連なる有力在地勢力との政治的関係や縦方向の身分秩序・階層差を第一義的要因としながら、一方で、出自性あるいは職掌に関連する集団差の要因が絡み合いながら、行われたと結論付けた。

総括的に言及すれば、陶棺は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて畿内および吉備を中心に使用され、8世紀前葉には小型化して蔵骨器へと変容した。その間、陶棺は粘土の持つ可塑性に富む物性から、時期差と地域性のなかで多様性をみせた。陶棺は6世紀中葉、畿内・南河内を嚆矢とし、その影響を受けて吉備では、6世紀後葉、備中南部を初現とした。畿内では、土師質亀甲形と土師氏との関連、須恵質四注式家形とは須恵器生産集団との結びつきが、一方、吉備では多様な背景が窺え、鉄生産に関わる有力在地勢力、製鉄・窯業など手工業に直接携わる工人集団、渡来系の人々、さらには仏教を受容した有力在地勢力など多様な人々の存在が、その背景に推測できる。すなわち陶棺は、畿内の土師氏に関わる集団によって、自らの職掌と主体性を表象する棺として創出された。職掌と役割こそ違え、彼らと同様の立場にあった吉備の人々は、陶棺を自らの墓制として積極的に取り入れた。そして、吉備の掌握と鉄資源の確保を緊要としたヤマト王権は、それを容認していったと推察される。

また、畿内および吉備以外の陶棺については、約8割が畿内系であり、吉備系は約2割に過ぎない。全国に点在する陶棺の大半が、畿内系陶棺の影響を受けて展開し、その約9割は須恵質陶棺であった。それらの多くが須恵器生産など火の制御をもって成立する熱産地帯に分布し、それらに携わる工人集団、あるいは彼らを統率する有力在地勢力などが被葬者と推察される。

陶棺の底流には、土を焼き固めた容器に死者を葬るという墓制をともにする心象と心的紐帯が存在し、加えて、ヤマト王権およびその掌握下にあった有力在地勢力への従属性と隷属性を象徴する棺形態であったといえる。